



広島大学 助教授
松浦 伸和

第14回

33円で授業を変える!?

～洞爺湖町立洞爺湖温泉中学校・大塚謙二先生の巻～



大塚謙二先生

最近では講演などのたびに、この記事を読まれているかどうか尋ねることにしている。平均して2割程度の先生方に読んで頂いているようである。少ないように思えるかもしれないが、全国で1万人以上の先生方にお読み頂いている計算になる。その中の一人に、私の先輩でもある北海道教育大学の萬谷隆一先生がおられる。ある会議でお会いした際、「あれいいね。ライフワークにするべきだよ」と激励の言葉をいただいた。その萬谷先生が推薦されるのが今回訪問した大塚謙二先生である。

私も数年前に一度お会いしたことがある。英検が主催した絶対評価の講演会の後、懇親会場でお会いしたのである。当時大学院で学んでおられた先生は、英語教育について熱く語り、「教科書にCDを付ける会の会長」とあるという話が印象的であった。

そのような大塚先生をぜひとも訪問したいということで、14回目の行き先は、洞爺湖や有珠山で有名な北海道の洞爺湖温泉中学校にした。

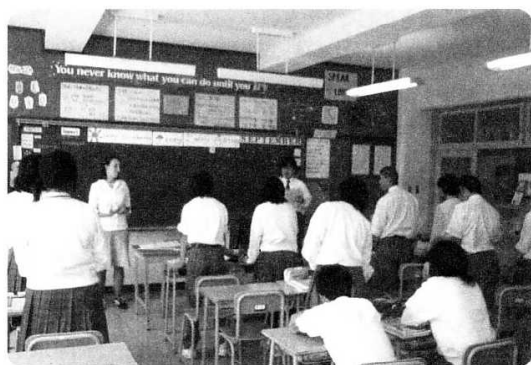
9月中旬の北海道は爽快、と言いたいところであるが、ちょうど台風が上陸しようとしていた。数日前に広島に接近した台風が再び遭遇するとは珍しい体験である。前夜は登別温泉で夏の疲れを癒し、大好物の毛ガニを食べて大満足。訪問した日は多少風が強い程度で、午後は台風一過、暑いくらいであった。

洞爺湖温泉中学校は湖畔の道を少し上ったところにある。校舎から洞爺湖の眺めがすばらしい。生徒たちは修学旅行でどこへ行っても、洞爺湖の景色の方がいいと言うそうだ。全校生

徒が64人という小さな学校で、生徒は「のんびりした田舎の子供たち」とのこと。2日前に洞爺湖の周り(約36km)を生徒と教師全員で8時間かけて歩き通す行事を終えたばかりであった。

授業参観は2年生13名のクラスで、Heidi先生とのチームティーチングであった。この連載では初めてである。挨拶をした後、数種類のウォームアップが続く。ここが一つの見せ場である。まずはEasy Question。What time did you get up this morning? など教師の質問に答え、答えた生徒を含む縦か横の

列の生徒が座れるというもの。よく見かける活動であるが、大塚先生の授業では、もっと答えた人は座らなくてもいいそうだ。



Easy Question でウォームアップ

次は Word Quiz to Heidi で、ある単語を生徒たちがヒントを与えて Heidi 先生に当ててもらおうというものであった。「日本ハムファイターズ」では、sport, baseball team, It's a Hokkaido team. (発言のまま)などのヒントを与えていた。そして Listening conversation and Q&A へと続く。先生方の対話を聞いて、その内容に関する問いに答えたり、分かったことを述べる活動である。筆者にも突然ふられて、対話に加わるはめになった。ウォームアップはメカニカルなものへと姿を変えてさらに続く。基本文型の定着を目指した Pair Check である。大塚先生が作成した『Memorization Sentences 147』という中学校で学ぶべき文法項目の例文集を使って、一方が日本語を言い、もう一方が素早く英語に直すドリルを行った。音楽を聴きながら2分30秒交代である。2秒ルールとか1秒ルールを入れて、それ以内で言い始められない場合は次の文に進む。最後は irregular verb. speak, cut, stand など教科書巻末の不規則動詞を先生が次々に言って、原形、過去形、過去分詞形を超高速で言うものである。1年生の時から行っているそうで、1分程度で全員がすべての動詞を言い終えた。ここまでがウォームアップで18分を要した。

次は文型の導入で、本時は You look happy. が新出文型である。‘Hi.’ ‘Yes.’ ‘You look happy.’ ‘Yes, thank you. It's because it's not raining.’ というALTとの対話を聞かせて、その内容を推測させた。生徒がやすやすと正解を言うと、「へえ、すぐわかったな。どうしよう。」とがっかりしてみせた。すると生徒の1人が「先生、やっぱりわかんなかったことにしよう」と大声で言うと、他の生徒達も、「先生、わかりませんでした」と口々に言う。日頃からの生徒との良好な関係がうかがえる。次に、隠した写真を下から徐々に見せながら Who is she? などとたずね、She looks happy. などとその様子を表現させる。これも時に茶々を入

れながら、楽しそうに答えていく。その中で、バレーボールの選手の写真を見せて She looks great in her uniform. と説明する場面があった。great の意味を推測させた後で、辞書を引いて確認させた。この段階での辞書指導はとても有効である。ワークブックを開いてこの文型の説明が書かれている部分に線を引かせた。ここまでで28分。

本文に入る。CDを1回聞かせた後に、ALTに本文と同じような体験を語ってもらい、聞き取ったことを発表させた。かなり速くて難度の高い英語であったにもかかわらず、ほとんど聞き取れていた。そのリスニング力の高さに驚かされる。そして新出語の導入へと進んでいく。裏に日本語訳を書いたフラッシュカードを高速で回転させながら、猛スピードでリピートさせていく。これで、通常は3割ぐらいの定着率が6割ぐらいにアップしたそうだ。授業の37分が過ぎた。

CDで、本文のリピート部分を流してスペースでだいたいの意味を言う「ほぼ同時通訳」が次の活動であった。‘Is he in love with me?’ に続く ‘Oh,... I don't know.’ を「ううん、微妙だね」と訳した生徒がいた。そして個々の練習なども含めて音読やシャドーイング、ALTとのペアリーディングなどが7、8分間行われた。授業の最後にもう一度シャドーイングを行ったが、その時には大きな声で完全にできていた。



盛り上がる音読風景

途中でも書いたが、生徒の笑い声や元気な発言が常に飛び交う授業で、Heidi先生が活躍する場面も多く、あっという間に時間が過ぎた。また、工夫されたアイデアに加えて、先生のとて美しい発音に感心した授業であった。



授業直後の生徒の声

A君：結構楽しい。すごく元気で、他の先生とテンションが違っていています。

Bさん：元気で楽しい授業です。わからないところでも、わかりやすく教えてくれます。

C君：楽しくて分かりやすい。大塚先生だから楽しいのだと思います。何より声が大きくて聞きやすいです。

D君：いろいろなことを次々にしてくれるので飽きないのがいいです。英語の授業が待ち遠しいです。

1 Warm-upを制するものは授業を制す

大塚先生の授業はバラエティー豊かなWarm-upが特色の一つである。今日の授業でも5種類の活動を18分間行った。Warm-upをコミュニケーションの場として、さらに集中的なドリルの場として位置づけているのである。

松浦：様々な活動がありました。ご自分で考えられたのですか。

大塚：はい。いろいろ試行錯誤して、良いものをチョイスし続けてきました。

松浦：大変な苦勞ですね。その時のポイントは何ですか。

大塚：いかに生徒を引きつけるかです。ゲームから始めましたが、楽しいけれど何も身につかないし長続きしませんでした。そこでコミュニケーション活動を考えました。生徒が追いつくか追いつかないかの速度、分かるか分からないかの難易度のタスクを考えました。「i+1」のタスクでやる気を喚起できると考えたからです。

松浦：生徒によって「i」が異なっているのが大変ですね。

大塚：そうです。1つの活動で全員の生徒にとって「i+1」のタスクになるように工夫しています。例えば今日のWord Quizでは、英語力に応じて単語でヒントを出しても文で出しても良いようにしています。

松浦：中でも特にお勧めのWarm-up活動を3つ挙げていただけますか。

大塚：まずは「Easy question」ですね。これは英検や入試にも役立ちます。次は「Memorization」です。瞬時にペアでやらせることで活気がでます。もう一つは「Word Quiz」でしょうか。縦横のペアやグループでやらせています。単語はリストから自分で選ばせています。この3つは生徒たちにも評判がいいですよ。

松浦：それをすべてプリント集



スピードが勝負のMemorization

にしているところがすごいですね。

大塚：ホームページ (<http://ok.ko.kg>)でも公開していますので、参考にしてください。

松浦：そうですか。有料でもいいくらいですよ。

大塚：来年4月に明治図書から出版する予定です。(皆さん買ってあげてください)

2 ヤマ場から作る授業計画

活気溢れる授業であったが、まず授業のヤマを決め、それを中心に授業計画をされているようだ。何より無駄な時間を作らないことが大切だと言う。「例えば、板書を写させることはしません。だから板書もほとんどしません。写すのに10分はかかります。写させたところで頭に残らないし、その間実力は付かないでしょ」重要な部分はプリントやワークブックに線を引かせるようだ。もちろん何も書かせないのではない。単語や目標文、本文、さらには日記まで書かせている。「書いた分だけ伸びるので、年間ノート3冊くらいは書かせています」と言う。

また、授業における活動形態にこだわっている。ある活動がうまくいかなかった際に、改善するポイントの第一は活動形態だそうだ。講義形式が一番あきるので、ペアワークやグループワークを適切に取り入れている。「机の距離がすごく大切です。心理的な距離に比例しますから。ペアワークをうまくやらせるために、日頃から机をくっつけて距離を縮めるように配慮しています」ペアワークを効果的なものにするには、活動内容に加えてペアの組み方や机の距離など隠れた部分にこそ配慮しなければならないのである。

さらに、毎回、簡単な指導案を書いているのだそうだ。「A4の用紙1枚程度のものですが、無駄な時間を作らないためには不可欠です。それがあればよみなく授業ができます」

3 教師は家庭学習のアドバイザー

洞爺湖温泉中学校には塾に通っている生徒がいない。したがって、自らで家庭学習ができるような手だても必要だとのこと。それも踏まえて作っているのが「お助けプリント」。このプリントには教科書本文、問題(内容を問うもの、内容をまとめるもの、和訳させるもの(必要に応じて))、発音のふりがな、全文の和訳が載せられているが、全文訳は山折りにして見えないようにされている。ふりがなも賛否両論あるが、家庭学習で発音を思い出すための手がかりとするためだそうだ。

そのプリントは授業で重点を置く部分や進め方を検討して作成するために、家庭学習のみならず授業中にも使うとのこと。「教科書の題材を分類すると、会話形式はペアの発表活動に、

日記手紙形式はリーディングに、物語や論説文は読みとりに重点を置いています」というアドバイスをいただいた。

実力に応じて課題を解く方法が選択できるようになっているのも特徴である。英語が得意な生徒は何も見ないで問題を進める。普通の生徒はアンダーラインの要点を参考にする。苦手な生徒は和訳も参考にして問題を解く。手も足も出ない生徒は和訳を先に読んでからプリントと英語に触れながら学習する、などと活用しているようである。

これらのすべてのプリントや配布物は大切にずっと使えるように、3つで100円のファイルに綴じさせている。「33円で授業が変わりますよ!」

大塚先生のライフヒストリー

大塚先生は教員歴21年で、本校が4校目だとのこと。

松浦：英語の教師になるきっかけは何ですか？

大塚：中高とも英語は嫌いでした。大学でも外資系の企業に勤務しようと考えていました。ところが教育実習に行った時、生徒とのふれあいが楽しく、まさに生きていく気がしたのです。それがきっかけですね。

松浦：教師になってからはいかがでしたか。

大塚：初任校の4年間は、大きな壁にあたりました。生徒達が授業に向いてこないんです。生徒達に興味を持たせるにはどうしたらいいのか悩みました。

松浦：何から手を付けましたか。

大塚：最初はフラッシュカードです。独自の方法を考え、生徒にも、分かる単語が増えたと言われたことが励みになりました。単語の量は大切ですね。

松浦：少し自信がついたのですか。そこで転任ですか。

大塚：そうです。2校目ではどのように英語力をつけさせるかを考えました。その頃に、長勝彦先生や金谷憲先生などと出会いました。

松浦：学ぶことが多かったでしょうね。

大塚：はい。教師としての話術、生徒指導、生徒を引きつける授業構成などいろいろと学びました。中でもパソコンやメディアを使った授業を試みましたが、興味を持ってもらえませんでした。そこで再びどうしようかと悩みました。

松浦：異なったレベルの悩みを持つのは教師としての成長の証ですよ。

大塚：ちょうどその頃(平成13年)に大学院で学ぶ機会を得たのです。これが成長させてくれましたね。先生とお会いしたのもその頃です。

松浦：大学院で学んで良かったことは何ですか。

大塚：例えば効果的な活動について、現場の教師は直感だけで善し悪しを判断しますが、大学院ではデータの裏付けを基に判断します。その際の理論などを学べたことが良かったです。問題を持って進学したことも良かったですね。

松浦：悩みをバネに成長する姿は素晴らしいです。今はどのような研修をしていますか。

大塚：ときどき達人セミナーに参加していますし、年に数回北海道英語教育学会に参加しています。最近は中高の現職の先生方の研究会も増え、とても勉強になります。

松浦：ますますパワーアップされていますね。次はどうなるのか楽しみです。

島崎校長先生とお会いした時の第一声は「大塚先生の魅力は人間性にある。昼休みは生徒とキャッチボールをしていますよ。生徒の周りには必ず大塚先生がいます」というのもであった。その校長先生も人間関係を大切にされる方で、大変お世話になったことに感謝したい。

ところで、大塚先生との話の中で、心に残った言葉は次のようなものである。

「お客さんを作らない」「卒業の時に必ず幸せになっている指導」「覚えるにつれ覚える時間は短くなる」「日本人を対象とした研究が必要」「最小限の努力で最大限の効果を得る授業を」「元気で安定した授業ができるように、毎日よく寝る。10時半には寝る」

最後に、恒例の全国の先生方へのメッセージであるが、「生徒との人間関係が授業の基盤なので、良い授業を作るには人間関係を築くことから始める方が近道です。また、授業で悩まれている方も多いと思いますが、難解なパズルと同じで、苦しいと思うより、解決した時の喜びを考えてお互いがんばっていきましょう。」というものであった。

校長先生いわく、大塚先生に生徒指導部長を依頼したら、「担任もさせて頂けるのならお引き受けします」と応えたそうだ。本当に生徒が大好きであることがうかがえる。洞爺湖畔の小さな中学校の校庭には、今日も子ども達の歓声とキャッチボールの音が響いていることであろう。



大塚先生